

宗教学宗教学

◇教員◇

教授：市川裕、池澤優、藤原聖子

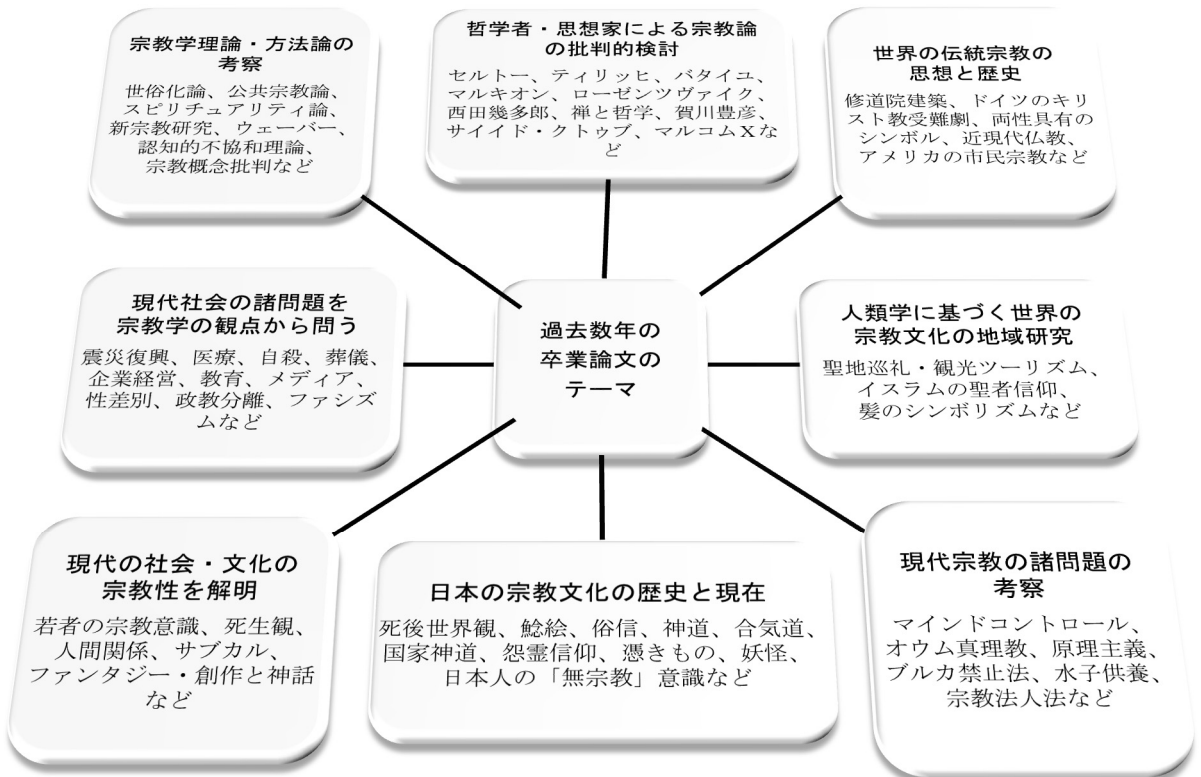
准教授：西村明

◇学生◇

学部：35名、修士課程：17名、博士課程：23名

(1) 宗教学宗教学専攻で学生は何を学んでいるか

当専修課程における学生の問題関心は実に多彩である。それも研究の分野や方法論が多彩なだけではない。当専修課程へ来た動機や学問的な好奇心の方向、自分の生き方にまで関わる多様性である。それは最近数年間に提出された卒業論文で扱われたテーマに典型的に表れている。



研究の方法論でいえば、哲学・歴史学・文献学・心理学・人類学・民俗学・社会学などにわたり、問題関心の点からは思想と宗教の関係・地域文化を特色づける宗教的要因・現代人にとっての宗教の意義などが主要なものになっていると言える。近年は、日本人の死生観、医療・被災地現場での宗教的ケアなど、死生学との関連領域のテーマも増えている。

(2) 宗教学宗教史学専修課程の特質

人類の誕生以来、人間のいるところはどこでも、常に人間と共に存在してきたと考えられるのが宗教である。宗教は人間の価値観や文化形成と密接に関わっているために、古今東西、宗教的世界観や信念に結びつかない・由来しない法秩序や儀礼体系、風俗習慣はほとんど存在しないほどである。当専修課程は、そうした極めて広範かつ多様な領域を相手に、「宗教」とは何かという問題を、様々な視点と多様な方法によって研究する場所である。

学問は客観的であることを目指さなければならない。とはいえ、人間の生死を意味づける宗教を学問の対象として扱うのであるから、単に対象を突き放して観察すれば済む問題ではなく、他者の理解、他者との絶えざる対話が必要となる。また、宗教は世俗を超越する志向性を有するゆえに、人を魅了すると同時に、その外側の社会にとり、非常に危険なものになる場合がある。しかしそのような宗教はまた、社会と無関係というわけでもない。社会の何らかの問題に対して警鐘を鳴らしていたり、あるいは社会の負の部分映し出す合わせ鏡であったりするるのである。つまるところ、正統的宗教であろうと、異端的宗教であろうと、それを知ることは私たち自身を知ることにつながる。宗教学を学ぶにあたっては、批判的精神を失わず、また自己満足や独善に陥ることのないよう、見識を磨いてほしい。歴史に学び（宗教史学）、理論を検討し（宗教学）、人間と文化を見る目を養ってほしい。講義と演習はそのために用意されている。

当専修課程は学生の主体性に委ねられた部分が多い専修課程である。それでも当専修課程の教育と研究を拘束する最低限の原則があるとすれば、以下の2点であろう。第1は、自己の信じる特定の宗教が最高であると主張し、論証し、宣揚することを目的とする研究は慎むこと。

授業の区分

宗教学概論

宗教史概説

宗教学・宗教史学特殊講義

宗教学演習

宗教史学演習

第2に、何を研究するにせよ、その根底に「宗教とは何か」という問題意識を持っていること。これが失われると隣接諸学との区別がなくなり、本専修に所属して研究する意義が失われる。以上の2点に留意してもらえば、いかなる立場からいかなる事象を研究することも自由である。ただ強いて言うなら、得意とする方法を1つと、研究対象に関係する言語を1つマスターしていると心強い。

(3) 教員の紹介と授業内容

他の専修課程との違いとして挙げられるのは、(平成27年度より)指導教員を定めてはいるが、いわゆる「ゼミ制」ではなく、基本的に全教員が全学生を平等に指導していることである。学生の側からすれば、その時々に関心にあわせて、自由に授業、指導者を選ぶことができる。

市川 裕：法学から旧約の預言者研究に転じ、更にタルムード研究を志し、戒律と聖典解釈を軸に包括的なユダヤ宗教文化研究を目指す。人類史を視野に入れた鍵概念は宗教的想像力である。講義では、ユダヤ教を一神教の世界宗教史に位置づける試みを続けてきたが、本年度は、宗教学から見た現代ユダヤ教を扱う。また駒場の新生対象に「ユダヤ教から見た一神教の世界宗教史」、学部ゼミで「ヘブライ語聖典研究」、大学院ゼミでは、引き続き、中世の賢者マイモニデスの思想を扱う。

池澤 優：学部で古代中国の祭礼へ関心を持って以来、中国宗教の研究を志し、甲骨・金文を材料に中国古代の祖先崇拝を分析、その研究を基礎にして祖先崇拝・死者儀礼の比較研究、死生学、生命倫理を視野に入れる。本年度は講義として「中国生死学の死生観研究」を、演習として「環境倫理文献講読」を担当するほか、死生学・応用倫理センター長を務める関係で、「応用倫理学入門」「死生学基礎文献講読」を担当する。大学院では中国古代宗教に関する英語文献を講読する。

藤原 聖子：学部では宗教を理解／説明するとはどういうことなのかという方法論的関心から出発し、近年は、公共圏における宗教の役割をどう位置づけるかが、世界宗教史の語り方にどう影響してきたのかについて学校教育をフィールドに国際比較研究を行った。本年度は、宗教学の主要な

理論を「使ってみる」ことを目的とした講義と演習、従来の「世界宗教史」叙述を批判的に乗り越えることを試みる講義、「無宗教」もまた宗教学の対象であり、新たな探究可能性があることを学ぶ演習、日本の宗教事情を対外的に説明するスキルを身につける演習を展開している。また、2年生内定者向けに、宗教学の基礎を学び、ゼミ発表の助走をする導入科目を開講している。

西村 明：卒論で供犠に関するフランス現代思想を扱って以来、主に他者への暴力と宗教の関わりに関心を抱いてきた。大学院進学以降は、戦争や災害による犠牲者の慰霊を通して、現在を生きる者たちにとって死者とはどのような存在かという問いを探究している。また、戦争という世俗的体験に見られる宗教的次元の比較研究も目下の課題である。本年度は近現代日本の宗教史を再検討し、他方で核をめぐる宗教的・神話的イマジネーションを取り上げた文献の講読や宗教学的なフォールドワークの実地調査などを行う。

この他、毎年、3～4名の非常勤講師を招いている。

(4) 卒業論文と卒論ゼミ

学生は各自の問題関心に沿って履修科目を選択し、各自の研究を進めることになるが、専修課程に進学後、新しい問題に目覚める場合も多い。だから焦って早くから自分の興味の幅を狭める必要はない。期待されるのは自分でよく考え、見極めていく姿勢であり、先人の業績を批判的に継承しつつ新たな問いを発していく目的意識と気概である。そのための挑戦の場となるのが「卒論ゼミ」であり、その成果となるのが卒業論文である。

卒論ゼミは平成9年度から始められた試みであり、毎年冬学期に開講する。その趣旨は、複数の教員の出席のもと、4年生は卒業論文の内容に関する研究発表を行ない、それを元に出席者全員で質疑応答を行なうことで、卒業論文の質的な向上をはかる点にあり、また3年生にとっては自分の問題関心に沿った研究あるいは重要文献の紹介を行ない、将来の卒業論文執筆に向けた準備を整える点にある。

卒論については、この全体の演習のほか、希望者に対する個別指導体制も充実を図っている。卒論執筆は就活と関係ないという思い込みがよくあ

るが、実際には、卒論ほど問題発見・解決力、コミュニケーション力が総合的に問われる課題はない。また、論文の書き方に関する指導書は数多いが、自ら書いてみて、それに対して他人から指摘を受けてはじめてわかることも多い。一人ひとりにカスタマイズした指導により、納得のいく卒論を書きあげられるようサポートしている。

(5) 研究室について

宗教学研究室は迷路のような法文2号館の3階にある。ここには宗教学関係の事典類がそろい、学生用パソコン、プリンター、コピー機があって、ゼミの準備や資料・レジュメのコピーには欠かせない。レポートの提出先であると同時に、教員のメールボックスもある。また勉学や生活のための情報交換の場でもある。相談役の教務補佐員、事務補佐員が常駐している。非常勤講師の控室でもあり、大学院生も頻繁に出入りする。昭和初期から愛用されてきた、木製の大きなテーブルを囲んでの、学問的な語らいや雑談、就活の情報交換、有志の勉強会などに利用されている。

研究室の恒例行事は研究会、忘年会、予餞会など多々あるが、最も重要なのは毎年6月ごろに行なう1泊2日の研究室旅行である。これは学部生から院生・教員まで、研究室の仲間の親睦をはかりつつ、様々な宗教施設を見学するもので、進学した3年生の歓迎会の意味もある。

(6) 卒業後の進路

就職先は、出版・放送・教育・製造業・金融などのほかに、近年では資格を目指して専門学校に通う人、演劇や音楽で身を立てようとする人など、考え方も多様である。また、宗教学独自の資格として、諸大学の宗教学者が運営する「宗教文化士」が2011年に発足した。これは世界の宗教の歴史と現状について一定の理解に到達した者に認定されるが、本研究室からも毎年数名が取得している。

研究者を目指す場合は宗教学専攻の修士課程に進学することが多いが、自分の関心にあわせて他の専攻や他大学の院に進むケースもある。大学院入試は語学(2言語)・専門・面接であるが、選抜においては卒業論文も評価の対象となる。